

ワークショップ3

放送番組確定表から探る「上方」放送文化の成立

—— JOBK のメディア史研究に向けて

司会者：後藤 美緒（日本大学）

問題提起者：丸山 友美（法政大学大学院 院生）

討論者：村上 聖一（日本放送協会）

放送事業がはじまって90余年が経つ。その間、節目の時期にはNHKや民放各局が「放送史」や社史を編纂し、放送事業を鳥瞰する土壌が整備されてきた。また、近年では、放送事業者の番組アーカイブスの整備とその活用も進んでいる。とりわけ、NHKアーカイブスの学術利用が展開されたことによって、放送事業に関する研究は多様な進展を見せるようになってきている。しかし、アーカイブスを利用した研究が進む一方で、放送史は東京を中心とする視点で描かれることが多く、各地の放送局の活動やその意義については十分に検討されてこなかった。

こうした背景を踏まえ、本ワークショップでは、新たな視点での各地の放送局の活動を描いていくにあたってのアーカイブデータやデータベースの利活用とそれをもとにした地方局の独自性探求の可能性について議論をおこなった。なかでも、日々の放送の記録である番組確定表をとりあげ、日本放送協会の大阪放送局（以下、JOBK）の特徴を描き出すことが試みられた。

ワークショップでは、まず司会者の後藤から企画の経緯が説明された。ここでは、対象とアプローチの異なる丸山友美会員と後藤が、NHKアーカイブスの閲覧を通じて、放送史の空隙としてJOBK史があることに気づき、番組制作と放送を通じて形成される放送の地域性という示唆を得たことが述べられた。

それを踏まえて、丸山会員が問題提起をおこない、まず、番組確定表の概要について紹介があり、通史的閲覧で得られた歴史史料としての利用可能性を検討していく上でのポイントが指摘された。具体的には(1)枚数、段組みといった形式の変遷、(2)略式記号の利用、(3)事後的な記入（捺印や構成作家や出演者等の書き込

み)、(4)東京放送局(JOAK)との比較である。以上に留意した作業によって、二局のあいだで放送開始時間や番組名の一致が見られなかったものが徐々に統一されることによってJOBKの独自性が縮小・喪失していったこと、他方で番組名や制作局の記載からJOBKが子どもや演芸の番組に独自性を見出す姿勢が判明したことが示された。また、番組構成者の情報から、草創期においてラジオと新聞メディアの交流が確認できたことが述べられた。人材やテーマの地域資源の発掘がJOBKの独自性を形作っていったことが番組確定表から明らかになることが示された。最後に、さらなる研究発展の課題として、研究の進展のための史資料の利用権限の拡大が求められること、また、正史にあらわれない事実への着眼が重要であることが述べられた。

以上の問題提起を受けて、村上聖一会員からコメントがあった。まず、JOBKと番組確定表に着目する意義が紹介され、つぎに番組確定表の資料的な問題点について述べられた。すなわち、(1)網羅的な記録とは限らないこと、(2)番組変更情報が加えられていない場合があること、(3)番組確定表が事後的に構築された可能性があることである。そのうえで、番組確定表を用いる際の留意点として、当時の新聞番組表などと比較しつつ、資料を精査する必要性が提起された。さらに、番組確定表を活用することで、語学番組や実験的な番組がJOBKから始まった点について検証できるのではないかとする見方が示された。最後に、資料の研究者向け利用の可能性について提案があった。

このあと、フロアから質疑応答を含めた自由討論となった。このなかでは、JOBK研究の対象と範囲をどのように設定するのか、といった議論が提起された。また番組確定表に着目することでJOBKの特徴とされる教育番組に関して放送局の果たした役割と新聞社・百貨店のそれとの相違が浮かび上がってくるのではないかと指摘や、放送事業草創期の放送局と新聞社の関係性が検証できるのではないかといった見解、番組確定表を資料として放送ジャンルの形成過程研究を進めることが出来るのではないかとといった見方など、多様な論点が示された。

議論を通じて、これまで十分に検討されてこなかった各地の放送局の特性について、番組確定表を通じて理解を深めるとともに、それぞれの放送局が有する長い歴史に向き合うことの重要性があらためて確認され、活発な議論のうちにワークショップは終了した。(参加者7名)

(後藤 美緒)